

## なぜ企業犯罪は繰り返されるのか 石原産業のフェロシルト事件から学ぶこと

昨年7月の公害判決35年を契機につくられた四日市まちづくり市民会議が、上記テーマで公開講座を開催した。講師はいま話題の『赤い土・フェロシルト』の著者である朝日新聞の杉本裕明記者だ。大阪などからも参加があり、会場は一杯であった。2時間にわたる講演のあと、質疑や意見発表が1時間余りつづいた。



『赤い土』はレポートでも紹介したように綿密な調査にもとづく、「企業や自治体の社会的責任を迫る警世の書」「執念の調査報道」であり、まるで推理小説のように興味深く読んだ。気鋭の環境ジャーナリストである著者の生の声が聞きたくて参加したが、やはり刺激的かつ示唆に富む内容であった。講演では、不祥事と偽装にあけくれた2007年を振り返り、事件の共通点に「内部告発」をあげる。公害企業・石原産業のフェロシルト事件も、「X」という情報提供者との出会いから取材が始まり、粘り強く真実に迫っていく。

この事件のキーマンを石原産業の歴史や体質と関わらせて明らかにし、フェロシルトで大儲けした者、産廃の経済メカニズムが緻密な取材にもとづいて示される。石原産業は、水俣病のチツソとよく似た系譜であり、公害を反省せず住民やマスコミを敵視する。企業犯罪がなぜ繰り返されるのか、公害企業に共通する問題点をあげる。とくに印象的なのは、三重県と環境保全事業団、そして政治家との癒着である。他の公害事件を含め、北川前知事をはじめとした三重県の責任を厳しく問う。三重県だけでなく、公害・環境行政における自治体の力量の衰退にも目を向ける必要があるとする。石原産業のフェロシルト事件から、現代日本社会をめぐる問題状況とともに、維持可能な社会に向けた教訓や課題が明らかにできる。

(2008年1月23日 記)